

2014年10月5日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書18章31～43節

説教：私をあわれんでください

1 エルサレムに向かう

1) イエスの行動計画

イエスは十二弟子をそばに呼び、これからエルサレムに向かうと宣言されます。そしてこう言われました。「人の子について預言者たちが書いているすべてのことが実現されるのです。」おそらくこれを聞いた弟子たちは、気持ちの高ぶりを抑えることができなかったはずで、イエスは、いよいよエルサレムに乗り込んで、イスラエルに革命を起こし、王座に座られる。そうなれば、自分たちはイエスの側近として人々から尊敬われ、地上の栄光を手に入れることができる。そんなことを期待しながら、イエスが次にどんなことばを語るのか、耳を澄まして待ちました。その時語られたのが、32, 33節でした。「人の子は異邦人に引き渡され、そして彼らにあざけられ、はずかしめられ、つばきをかけられます。彼らは人の子をむち打ってから殺します。しかし、人の子とは三日目によみがえります。」

2) 真理を見ようとしなない弟子たち

聖書には、弟子たちはこのことばを聞いても何一つ理解できなかったとあります。みなさんは不思議に思わないでしょうか。イエスと三年半にもわたって寝食を共にし、毎日訓練を受けてきた弟子たちです。そんな彼らが、なにもわからなかった、そんなことがあり得るのだろうか。

イエスのことばを聞いたとき、弟子たちはおそらくこんなことを考えていたはずで、

「先生は、最悪のことばかりを語っているけれど、そんなはずはない。絶対にこの事業は成功するはずだ。だって、今まで先生は何度もすばらしい奇蹟を起こしたではないのか。パリサイ人、律法学者に対してさえ、権威ある者のように語っていたではないか。悪霊でさえおびえた声をあげて逃げ出していったではないか。それなのにどうして失敗すると言うのか。そんなはずはない。」

皆さんはこんなことを考えたことはなかったでしょうか。「最近太ったように感じるけれど、本当の体重をしたくないから体重計には乗りたくない。」あるいは、「最近体調があまりよくないが、大きな病気が見つかるのが恐いので、病院に行きたくない。寝ていたら良くなるだろう。」きつと思ひ当たる節があるでしょう。人間は、自分に都合の悪いことはなかなか認めようとしなない。そういう傾向があります。悪いことはできれば考えたくありません。だって、今は順調ではないか。これからもきつと大丈夫にちがいない。常に物事を楽観的に考えようとする。それが人間なのです。弟子たちもそうでした。イエスが、真理を語ってくださったのに、弟子たちの目は真理を見ようせず、閉じられたままでした。

2 エリコの近くで

1) 見ようとしなない弟子たち、見たいと願う盲人

さて弟子たちの話は一旦ここで終わります。続いて35節からは、エリコという町の

近くいたある盲人の話が始まっていきます。福音書を読んでいると、一つのできごとが終われば、次にまた新しい別のできごとが始まり、ばらばらに書かれている、そう感じるかもしれません。ところがそうではありません。まるで織物のように、すべてのできごとが密接に関係しているのです。

この箇所もそうです。34 節までの弟子たちのことと、35 節からの盲人の話はつながっております。どこでつながっているか。先ほどヒントを申し上げましたから、もうお気づきだと思います。弟子たちは真理のこトバを聞いたのに、見ようとしませんでした。心の中で見たくないと叫んでいました。一方盲人はどうであったか。イエスに向かって「ダビデの子よ。私をあわれんでください」と叫び、「目が見えるようになりたい」と願い出ていきます。目が閉じられたままの弟子たちと、目が開かれていく盲人。この対照的な二つのグループを並べることで、イエスがどのような方なのかを深く理解できるような仕組みになっています。

2) 「わたしに何をしてほしいのか」

では、イエスのどんなお姿がわかるのでしょうか。41 節の、イエスが盲人に尋ねているみことばに注目します。「わたしに何をしてほしいのか。」

実に不思議な質問です。イエスは神です。この人が何をしてもらいたいのか、すべて知っておられるはず。けれども、イエスはなぜかわざわざ丁寧に、尋ねるのです。原文に即してもう少し詳しく訳すとこうなります。「わたしはあなたにどんなことをしたらよいのだろうか。あなたの願うことは何ですか。」イエスは、まるでご自分がこの盲人

よりも低い所におられるかのようなへりくだった姿勢で尋ねているのです。わからないので教えていただけないだろうか。そんな言葉遣いです。

盲人は答えました。「主よ。目が見えるようになることです。」実に予想どおりの答えです。そして願いのとおりに、イエスは盲人の目は開かれました。めでたし、めでたし。ここを読んだ私たちは、「神のみわざはすばらしい」と結論づけ、それ以上深く考えることはほとんどないでしょう。

3 イエス

1) 神の御顔を見た者は死ぬ

本当にこれが話のすべてなのでしょう。大切なのはここからです。この人は、開いていただいた目でいったい何を見たのですか。目の前に立っておられるイエスを見ることになりました。神の御顔を見たことになりました。これまで真つ暗闇の世界で苦しんで来た人が、「ダビデの子よ。私をあわれんでください」と叫び続けたとき、やがてこの人は神の御顔を見ることになりました。神が私たちをあわれんでくださる、とはそのようなことなのだと語っています。でも、神の御顔を見ることがそんなに特別なことなのかと、疑問に思う方もいるかもしれません。

アダムが神に造られた最初の時、人は神の御顔を見ることができました。ところが、アダムが罪を犯し、神を恐れて隠れるようになったときから、私たちは神の御顔を見ることができなくなりました。聖い神に近づいてしまうと、罪に汚れた人間は死んでしまうのです。

旧約の預言者であるイザヤは神に出会ったときこう叫びました。「ああ。私は、もう

だめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見たのだから。」

(イザヤ書6章5節)このようにかつて旧約聖書の預言者たちは、神の御顔を見た者は死ぬと言って恐れしました。

2) 御顔を向ける

そうしますとここで一つの疑問が出て来ます。イエスは神の子です。ということは、イエスの御顔を見た者は全員死ぬはずではないか。けれども、だれ一人イエスの御顔を見て死んだ者はいません。考えてみると不思議です。

私たちが死ぬことのないように、イエスは人の姿となられ、顔もマスクをするように本当の顔を隠していた。そういうことかもしれません。でも、神はどんな方でしょうか。愛する者であるなら、ご自分の本当の顔を見せたいと思う方ではないですか。けれども、いきなりそれをやったら相手は死んでします。そこでどうするか。

イザヤを見るとわかります。神はイザヤをあわれみ、燃えさかる炭をもってイザヤの罪を贖いました。その結果、イザヤは神を見ても、死ぬことを免れました。

この盲人もそうです。ただ肉の目を開いていただいたわけではありません。弟子たちの心は頑なでその肉の目は見えていたけれど、霊の目は固く閉じられたままでした。けれども、この盲人の場合は「見えるようになりたい」と願った結果、肉の目が開かれたと同時に、霊の目も開かれました。霊の目によって神の御顔がはっきりと見えるようになりました。神の御顔を見ても死にません。なぜですか。イザヤもそうであったように、罪が赦されて

いるからです。

そうしますと、イエスがこの盲人をあわれんで、何をしてくださったのかがわかってきます。イエスはただ盲人の目を開いたのではありません。目を開くと同時に、この人の罪を赦していたのです。罪を赦して、神の御顔が見えるようにしてくださいました。

では、この人の罪はどこに行ったのでしょうか。消えてなくなったのですか。いいえ、とんでもありません。さばかれない限り、罪は永遠に消えてなくなることはありません。どこへ行ったのでしょ。イエスが背負ったのです。罪のない方が、この盲人の罪を背負われました。その罪を背負って十字架に向かわれます。この人の身代わりとなつてさばきを受けられます。異邦人に引き渡され、あざけられ、はずかしめられ、つばきをかけられます。この方をむちで打ち、殺します。そのようにしてさばきがなされていきます。それでも主は、信仰を捨てません。父なる神が必ずあわれんでくださることを信じていのちを捨てて行かれます。その信仰に応えるように、父なる神はこの方を三日目によみがえらせてくださいました。

3) 願ったこと以上の恵みを注ぐ

「あなたのために、わたしは何をしただろう。」このように尋ねる主は、私たちの願いを聞き、願ったことだけをかなえてくださる方ではありません。願ったこと以上のことをしてくださいます。御顔が見えるように霊の目を開いてくださいます。もう死ぬことがないようにと、私たちの罪を背負い、苦しみ、いのちを捨て、そしてよみがえってくださいます。この盲人が経験したのとまったく同じことを、主は皆さんお一人お一人の

ためにもしていただきます。